

【第四卷・琳派400年】 古典の日絵巻



後水尾天皇像 尾形光琳筆
(宮内庁書陵部蔵)

東福門院像
(光雲寺蔵)

第3号：平成26年7月1日 琳派と御所 ——2 古今伝授から御所伝授に

文禄から慶長に代わる年(1596)の六月、後陽成天皇の第三皇子が誕生しました。後に琳派にとって重要なキーマンとなる後水尾天皇です。なぜなら、江戸初期の京都を見る時、御所の存在を外して考えることができないからです。

その第一は、御所が古典研究の中心となったことです。古典文学の伝承としては、「古今伝授」という秘伝があったことがよく知られています。「古今伝授」が後水尾天皇の宮廷では「御所伝授」に変化します。その実像についてはまだ良く判りません。しかし、「御所伝授」では、今日、国歌として歌っている「君が代」を「千代にや千代に」と歌い、「八千歳といふは他流の心不用也」と解釈しているのです。これは和歌だけではなく伊勢・源氏物語なども独自の解釈が進められていたのです。

国旗に向かって「君が代は千代に八千代に」と歌うものだと、極当たり前に思っていた筆者にはショックです。琳派が誕生したこの時期の御所では「たたちよにやちよには千世々々といふ心也」という考えが固まりつつあったのです。

この賀の歌である「君が代」のことだけではなく、広く古典文学の解釈にも関わり、文芸復興の意識が後水尾天皇の宮廷に広がっていたことは要注意です。それは御所に親近感を抱いていた京都の町衆にも浸透していったであろうと想像できます。勿論、琳派の人々にも伝わっていた、と考えられます。家康の孫 娘・和子が入内し、後水尾天皇の後・東福門院となります。彼女の衣装を納めていたのが雁金屋の尾形家ですから、宮廷内のいろいろな情報について知ることができたであろうと、推測できます。宮廷から流れ出てくる古典文学にまつわる解釈が琳派の形成に大きく係わっているといつてよいでしょう。

『ことば・詩・江戸の絵画—日本文化の一面を探る—』兼築清
恵・高柳誠・矢部誠一郎 玉川大学出版部2004

